

# 石狩浜とハマナスの今昔

## 香りの歴史を刻む海辺

香りの通信舎 伊藤 由起子

「海辺のバラ」との異名を持つ日本の野ばら、ハマナス。花は西洋の香料バラにも引けを取らない、芳しい<sup>かぐわ</sup>香りを有する。昭和期に香料が生産されたことが知られているが、石狩浜のハマナスによる香料づくりは明治初期にまでさかのぼることができる。北海道開拓使が、官営事業としての可能性を模索して取り組んだのだった。

1876年（明治9）、最初に試作されたのは、花びらを蒸留して得られる芳香蒸留水だ。1879年（明治12）には、高級香料のバラ油に匹敵するハマナス油の抽出に成功。翌年の記録では、6月上旬から約1カ月をかけて、石狩浜で少なくとも2.5トンの花を摘み、札幌へ運びハマナス油を抽出している。

ハマナス油は香水に仕立てられ、宮城県博覧会（1880年）や内国勲業博覧会（第2回・1881年）に出品された。開拓使の役人は、出品した<sup>はまなす</sup>「玫瑰香水」の解説書に、ハマナスの咲く石狩浜について次のように記している。

「見渡す限りの砂地<sup>どんりょく</sup>に、嫩緑<sup>せんこう</sup>（若葉色）と浅赤<sup>くんこう</sup>（桃色）のなきところはなく、清楚な薫香がほど近くからはるか遠くまで香り連なり、その奥深い景色はすばらしく手ですくい取りたいほどである」（筆者、意識）

当時の石狩浜にはどれほどのハマナスが繁茂し、どれほどの香りがたちのぼっていたのだろう。想像をめぐらせずにはいられない。

その後、化粧品産業の発達により香料需要が激増すると、質的にも量的にも国産を凌駕する輸入香料が市場を占めるようになる。開拓使の香料事業も途切れてしまったようだ。

香料会社によって、ハマナスの香料が本格的に生産され始めるのは1938年（昭和13）。本道に進出した曾田香料が手がけたもので、同社は全道各地の群生地に花びらの買取所を設置。近隣住民が摘み取った花びらを買取ることで、原料を確保した。

石狩にも親船町と厚田区聚富に買取所があり、海辺で人々が花を摘む光景は夏の風物詩であった。主に女性や子供たちが花を摘み、家計の足しとなる副収入やお小遣いを手にした。授業で花を摘み、学校で使う文具代や修学旅行の費用に当てたこともあったという。



石狩浜でのハマナスの花摘み。花が開ききらない方が摘み取りやすいため、早朝に摘む人が多かった。1955年。『曾田香料七十年史』より



北海道開拓使文書。開拓使による香料づくりに関する記録が、このような簿書（綴られた文書）のあちこちに散在している。北海道立文書館所蔵。



厚田区聚富にあった花びらの買取所。買取業務を担ったのも、香料会社から依頼を受けた地域の住民であった。ここでは農家が、納屋を使って買い取りに当たった。1961年ごろ。高橋キミさん提供

ハマナスの香料は国産のバラ香料として評価され、高級化粧品に用いられた。生産が中止されたのは1967年（昭和42）。海浜地帯の開発により群生地が減り採取が難しくなったことと、合成香料や外国産との競争の激化が要因である。石狩市は自然・景観保護のため、1960年（昭和35）に採取規制に踏み切っている。

今、石狩浜には「ハマナス再生園」が整備され、花摘みから芳香蒸留水の抽出までを体験できるツアーなどが行われている。保全と再生と活用の三つどもえが成立する形で、人々がこの香りの魅力を共有しうる場として石狩浜があり続けてくれたらと願っている。

